

教務だより

2017年6月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

パラダイムの転換ということ

茗溪塾塾長 宇野雅春

「パラダイム」というと難しい言葉ですが、簡単に説明するとその人もしくは時代や社会が持っている「物の見方」のようなことです。これまでの経験や社会の在り方などから自然とできてくる物の見方や考え方ということになります。個人として考えると百人百様経験が異なる分、同じ事柄に触れても、見方が違うことにもなります。

たとえば「東大生」と聞くと、いかにも賢そうで神経質な人物を想定したり、人によってはオタク的人物と考えたり。価値観によっては「かっこいい」人と決めつけたり、さらには東大生の女の人ならきれいな人はいないといった個々に生きてきた時代のパラダイムに基づく、様々な見方があります。しかし、実際は全く違います。

塾の講師歴が長いので断言できますが、容姿と学力は決して比例関係ではなく、ましてや反比例でもありません。これだけは断言できます。パラダイムというのは時として単なる「思い込み」にすぎないという事なのです。そこからどれくらい自由になるかが人の「人間としての幅」を作るのではないかと昨今考えるようになりました。

子供が中学受験をしていたころ、一緒に夜遅く電車で家に向かうことが多くありました。ある日、座ることができた満員電車の中で、子供は屈託なく問題集を広げ始めました。通勤帰りの少し酒の入った人や、疲れ果てている人々のじろじろ見る目に屈することなく、ばらばらと問題集を広げては読みふけています。気がつく、子供の目の前の席でさっきまで眠っていた酔った感じのおじさんが勉強しているらしい息子に気がついて、いろいろ質問し始めました。「今、帰り?」「塾で勉強してきたの?」…「勉強ばかりしていてもだめだよ。」…そのうち私が父親であることに気がついたのかしばらくは黙りました。電車が駅に着いたとき、後ろから追いつきざま「お父さんに負けるな!」みたいなことを言って立ち去りました。ちょっと前の時代の色として、勉強に対する暗いイメージは、やはり根強かった気がします。深夜まで勉強を強制する親と、健気にそれを強制される息子というパラダイムが酔っ払ったおじさんの頭にはあったのでしょうか。ここでパラダイムを転換してみましょう。「受験勉強はきつくて辛いもの」というパラダイムを「受験勉強はやりがいのある楽しいこと」と転換するのです。事実、息子は勉強が楽しくて仕方なかったようでしたし、今から思い返すと、親子にとっても中学受験自体が楽しい思い出の数々を提供してくれたと思います。「受験勉強ってすごい楽しいよね!」という形のアプローチが可能であれば、もっと効率的で有意義な時間として受験勉強の時間が保証されると思うのです。確かに合格、不合格さえなければ、勉強がきつく苦しいものにはならないのかもしれませんが、思い込みや偏見を一度転換しそこからまた課題をくみ上げなおすと、違った良い方向が見つかるかもしれません。

「仕事」も同じです。意義や喜びのない仕事は人をダメにします。やらされ「仕事」、やらされ「勉強」になっている場合は多分その人の「パラダイムの転換」が必要ということです。